ほない歴史通信
第１１０号
2024(令和６).3.1

深刻化する人口減　人口予測から目が離せない

―「消滅可能性都市」提言から十年後の現実―

二〇一四年（平成二六）五月、日本創成会議・人口減少問題検討分科会（座長増田寛也氏）が『中央公論』（同年六月号）誌上で衝撃的なレポートを公表した。二〇一〇年から四〇年までの間に「二〇～三九歳の女性人口」が五割以下に減少する自治体数は八九六（全自治体数の四九・八％）にも及び、「これらは、このままでは消滅可能性が高いと言わざるをえない」と断じている。しかも、同誌には「消滅可能性都市八九六全リストの衝撃」と題して自治体名が掲載されたため、このレポートは大きな注目を集めることになった。これが契機となったのか、当時の安倍内閣は同年八月頃から「地方創生」を唱え始め、関連法の制定、「人口ビジョン」「総合戦略」の閣議決定、交付金事業の実施等、全自治体を巻き込んで地方創生の具体化に奔走するようになるのは周知の通りである。なお加えれば、前記八九六自治体には大子町も含まれていた。

それから十年、この間に地域の人口はどのように推移したか。昨年の一二月二二日、国立社会保障・人口問題研究所が、二〇五〇年までの三〇年間について都道府県別と市区町村別の総人口を推計した「地域別将来推計人口」を発表した。当推計からは、二〇二〇年に比べて五〇年の人口が三〇％以上減少するのは一一県、五〇年に高齢者の割合が四〇％を超えるのは二五県、五〇年までに九八％の市区町村で人口が減少し、対二〇年比で五割以上の人口減少を示すのが三四一市町村（茨城県では大子町、河内町、稲敷市）、五〇年に高齢者の割合が五割以上を占めるのは五五七市区町村（全自治体の三二％、茨城県では大子町ほか一〇市町）であること等、地方圏では依然として人口減少と高齢化には歯止めがかからず、今後もさらに拍車がかかる将来の姿を読み取ることができる。

では、「消滅可能性都市」の一つに数えられた大子町についてはどのような人口推計がなされているのか、いくつか特徴を紹介しよう。まず人口総数は、二〇二〇年の一万五七三六人が三五年の一万三三六人を経て、五〇年には何と六二三一人へと六割も減少するという。半減以上にも及ぶ減少率は、もちろん県内では最も大きいものである（第二位は河内町の五三％）。また、同期間に高齢者の割合は四六％から六四％へ、七五歳以上は二五％から四四％へともに上昇し、両者とも県内では最も高い割合になっている。これら人口減少と高齢化に関わる推計において、大子町は県内で断然先頭を走る位置にあると言ってよい。前述した「消滅」云々の重要な指標となった、出産を主に担う「二〇～三九歳の女性人口」の推移に着目すると、二〇年の八四七人から五〇年の二〇〇人へと実に七六％の減少率をみせている。県全体では三四％の減少率であるから、この点でも大子町の突出ぶりが鮮明である。これら各数値は、過去に行われた一三年推計値や一八年推計値を上回る形で進行した結果である点も忘れてはならないだろう。

「消滅」するかどうかはともかく、将来推計人口が提示する二〇五〇年の大子町の将来像は決して楽観視できない、いやむしろ、厳しいの一言に尽きるのではないだろうか。「将来」と言っても、あと僅か二六年後のことである。この予想される事態にどう向き合っていくのか、行政と住民が協働して取り組む、より戦略的なまちづくりが待ったなしであると思えてならない。（齋藤典生）

島根から学ぶ地方創生

―心の過疎化を解決する関係人口―

木村朱里

鳥根は、どんなイメージでしょうか。出雲大社や石見銀山。宍道湖のしじみやのどぐろなども美味しい所です。現在、私はこの島根で、以前から興味があった地域づくり・地域ブランディングを学んでいます。今回、大学生ながら『ほない歴史通信』に寄稿する機会を頂き、とても嬉しく思います。

今日、日本各地で過疎問題が起こっています。この「過疎」という言葉、発祥の地と言われているのが島根です。昭和四十年（一九六五）に島根県美濃郡匹見町（現：益田市）の町長が国会で「過疎」という言葉を用いて、町の人口減少を強く訴えたのが始まりと言われています。第一次・第二次ベビーブームにより日本全体の人口が増加した中で、島根の人口は既に減り始めていたのです。こうして過疎問題にいち早く向き合うこととなった島根は、地方創生最先端の地として全国から注目されるようになりました。

そんな島根では、地方創生に関して先進的な事例や取り組みが進んでいます。そのうちの一つ、「関係人口」という考え方は、島根県立大学の田中輝美先生の著書『関係人口をつくる』（二〇一七年刊）から注目を集めました。交流以上、定住未満の存在で、その地域に継続的に関わるよそ者である関係人口は、島根各地の活性化を支えるキーパーソンであり、島根の地域づくりに深く関わっています。私のような大学生もその一人です。各地方で人口を取り合うのではなく、人口を共有するというこの考え方は、コロナ禍で多様化したライフスタイルが後押しし、普及し始めています。

この関係人口、地方地域にどんな影響を与えるのかというと、心の過疎化の解決・予防に効果があります。心の過疎化とは、住民が地域への愛着を失い、そこに住む意味と意義を失うことを意味します。心の過疎化は、人口の多い少ないに関係なく、住民の主体性を低下させ、地域をさらなる衰退へとつなげていきます。しかし島根では、関係人口が流入することで、住民の地域に対する意欲が向上する事例が確認されているのです。ある人がある地域に対して愛着を感じ、関係人口となって地域存続のために課題に向き合う。その人が一生懸命に動く姿が別の誰かの心を動かし、地域への興味につなげて関係人口が増加する。そんな関係人口の姿を見た地域の人々が「自分も何かしたい」と動くようになる。人が人を呼んで地域に好循環が生まれるのです。私も、島根の関係人口として様々な活動をしています。昨春には、島根県大森町で「石見銀山まちを楽しくするライブラリー」という施設を地元の方々と共に作り上げました。今も継続的に関わっており、地元企業やガイドの会と協力して企画・運営などを行っています。大森町は、関係人口を積極的に取り入れ始めてから、人口減少は続きつつも、生まれる子供の数が年々増加しており、最近では様々なメディアで取り上げられています。国全体として人口が減少している今、単純に人口を増やすよりも、その地域に関わる人の数と質を上げることが持続可能な地方の実現において重要になってくるのではないでしょうか。

ここまでの話を踏まえて、茨城について考えてみましょう。数年前、茨城県が最下位となった都道府県魅力度ランキング、皆さんの周りではどのような反応がありましたか。私の周囲では「しょうがない」や「注目されるだけいい方だ」という諦めの言葉が多かったです。これは心の過疎化ではないでしょうか。地元への誇りや住み続ける意義を見失っていては、地域は衰退する一方です。茨城の心の過疎化を解決するため、数ある選択肢のうちの一つとして関係人口に注目してほしいと強く思います。

（大子町大子出身、島根県立大学地域政策学部三年）

大子町で小さなコーヒー屋ができること

和田まりあ

初めまして、矢田で「コーヒーと家具のお店 hajimari」を運営しています、和田まりあです。今回、寄稿の機会を頂いたので、せっかくならこれまでと違った層にも届けたいと思い、日本語と英語で書いてみることにしました。何かのタイミングで、英語圏の方々の目に触れ、当店を通して大子町に興味を持ってもらえたら幸いです。

私は、二〇二〇年二月に県北地域おこし協力隊として大子町に移住しました。出身はつくば市ですが、海外や東京にも長く住んでいて、ずっと利便性ばかり重視していました。大子町に興味を持った最初のきっかけは、あるプログラムでこの町を訪れ、地元の方々の温かみや、豊かな自然に触れたことです。ただ、一番の決め手は、二〇一九年一〇月の台風一九号でした。ついこの間訪れた町で、台風により川が氾濫し、多くの民家が浸水してしまったのです。連日放送されるニュースを見て、居ても立ってもいられなくなり、何度か災害ボランティアとして大子町に通いました。大したことはできませんでしたが、地元の方々からたくさんの感謝の言葉を頂いたり、他のボランティアメンバーと一緒に過ごした数日は今でもしっかり記憶に残っています。その時の恩返しがしたくて、移住を決めました。

hajimari は、コーヒー焙煎士の私と建築屋の中村聖が共同で運営しています。彼が築一五〇年の古民家を改築し、私は大好きなコーヒーの香り・味・空間を届けています。「hajimari」という店名には、私が珈琲焙煎士としてのキャリアをスタートしたように、訪れた人にとって、何かの小さな出発点になればという想いが込められています。

私のコーヒー好きは、父の影響です。高校の頃から親元を離れ東京で生活をしていましたが、実家に帰って玄関を開けると、コーヒーがふわっと香り、それだけで心が落ち着きました。どんな時も無条件に肩の力が抜ける、そんな安心安全な場を作れるのは、焙煎士だと自負しています。

そんなコーヒーに添えるスイーツも自家製です。お菓子作りはほぼ未経験でしたが、豊富にある地元産の食材の美味しさに感動して、これらを使い自分で作ってみたいという思いが大きくなりました。いつも試行錯誤しながら作っているので、「おいしかった」と声をかけてもらえた時は、嬉しい気持ちと自信になります。

最後に。大子町の人口は、移住当時、約一万六七〇〇人でしたが、今では一万五〇〇〇人を切りました。単純に計算しても、四年間で約一七〇〇人の方が町からいなくなっているという事実は、生々しい衝撃です。今後もっと加速する人口減少に小さなコーヒー屋は何ができるでしょうか。

町と多様な関わりを持つ層「関係人口」が、過疎地域存続のキーになると言われています。まさに災害ボランティアがそれでした。観光客でも地元民でもない人たちが足を運び、町のピンチを救いました。「関係人口」は国内に限定しなくていいはずで、今回、私が英語で書こうと思ったのも、世界中に大子町の関係人口を作りたい・作れると思ったからです。今後は、コーヒーをきっかけに、世界中に大子町を知ってもらえるようなコーヒー文化の提案・発信をしていけるよう、より一層努めてまいります。

（大子町矢田在住）

コーヒーと家具のお店 hajimari
営業時間：10 時～17 時
定 休 日：月・火・水曜日
住　　所：大子町矢田 654

traditional house, where he sells Japanese antique furniture. Alongside, I roast coffee and share its rich aroma, taste, and the inviting atmosphere it creates with our customers.

The name "hajimari" translates to 'beginning' or 'to start something' in Japanese, symbolizing both the i) inception of our new business and ii) our desire to serve as a starting point for our visitors' journeys.

My journey into coffee roasting began with my childhood memories. My father taught me an appreciation for the warmth, comfort, and security that a well-crafted cup of coffee can provide. Each time I returned home, he would brew a cup of coffee, its aroma enveloping me in a welcoming embrace. This inspired me to create similar moments of tranquility for others, leading me to pursue a career as a roaster. I chose roasting over being a barista because I believe it is a roaster who engages deeply with the selection of beans and roasting levels to unlock and savor the full spectrum of aromas that coffee can offer.

To enhance your coffee experience, we offer homemade cakes made with locally sourced ingredients. Although I initially had limited experience in baking, the exceptional quality of local vegetables and fruits has inspired me to embrace cooking with them. It brings me the greatest joy and bolsters my confidence when customers give positive feedback.

To conclude, let's discuss the future. When I first moved to Daigo Town, the total population was about sixteen thousand seven hundred. However, it has since decreased to less than fifteen thousand people. The reality that over one thousand seven hundred people have left the town in just four years is a stark reality that leaves an impact on the community. So, what role can a small coffee shop play in addressing such a community issue?

The concept of 'relationship-population' is increasingly recognized as a solution for social issues in depopulated areas. Unlike residents or temporary tourists, these are individuals who care for and consistently visit the town. My engagement in disaster volunteering when I first connected with this town can be considered one form of relationship-population. Since physical distance does not preclude forming 'relationships,' I believe such connections can extend even to people coming from outside Japan. With these aspirations, I have written this in English to reach a broader audience. I am committed to promoting and spreading coffee culture to encourage more people to start ("hajimari") a relationship with Daigo Town.

What a small coffee shop can do in the relocated town, Daigo

Maria Wada

Hello! I'm Maria Wada, the owner of "hajimari" a cozy coffee and furniture shop in Daigo, Ibaraki, Japan. We're a little spot that's still blooming, and we're getting ready to celebrate our second anniversary this coming May.

With this delightful opportunity to share our coffee shop's story, I am writing in English. I'm eager to draw the gaze of a diverse audience, including English-speaking folks, to our shop "hajimari" and the inviting community of Daigo Town.

To give you a bit of my background, I relocated to Daigo Town in February 2020 as a part of a team dedicated to regional revitalization. Although I am originally from Tsukuba City, Ibaraki, I have lived in Tokyo for most of my twenties. My connection to Ibaraki and its residents was limited during that period. I was drawn to more developed towns because of their convenient work commutes and the proximity to supermarkets.

My viewpoint on local issues shifted after participating in an entrepreneurship program, which afforded me my first opportunity to visit Daigo Town. The warmth of the locals and the beautiful nature I encountered on that initial visit are unforgettable.

My attachment to Daigo Town deepened due to Typhoon No.19 in October 2019. It was shocking to witness the town I had recently visited suffer from the typhoon's aftermath, with rivers overflowing and many homes flooded. Watching the news every day, I couldn't sit still, so I visited the town multiple times and volunteered to remove rubble and mud from the homes. Although my contribution was limited, I received much kindness and many expressions of gratitude from the locals. It was a challenging time for all, but there were also moments that brought smiles from our interactions, with whom I still maintain relationships. My experiences in Daigo have undoubtedly boosted my motivation to relocate and have made me more eager to engage in local activities, not only to 'give back' what I received but also to uplift the town as a community member. This is why I decided to open a coffee shop in this town.

"hajimari" is co-managed by Satoshi Nakamura, an architect, and myself, a coffee roaster. We are very fortunate to make a living by doing what we enjoy. Satoshi renovated a 150-year-old

大窪光謙の「封内道の記」（上）

吉成英文

嘉永二年（一八四九）三月、大久保村（現在の日立市）の大窪光謙は姉婿光禘と従者と三人連れ立って大生瀬村（現在の大子町）にある母の生家を訪ねる旅に出た。時に光謙十五歳。母は大生瀬村の修験常蓮院瑤璟（俗称：佐藤氏）の娘で、大久保村で医業を営んでいた大窪光茂に嫁いでいた。

光茂は医業の傍ら近郷、近在の子弟を対象として寺子屋を開いていたが、天保年間には自らの土地を水戸藩に提供して興芸館を設立している。興芸館は後に暇修館と改められ、更に安政二年（一八五五）には水戸藩郷校の大久保郷校となっている。

光茂の子光謙は幼少の時から父親のもとで学問に励み、特に和文、和歌に親しみを持っていたようである。が、万延元年（一八六〇）二十六歳の若さで死去している。

さて今回紹介する「封内道の記」は光謙が母の生家を訪ねた時の道中日記であるが、自筆本は現在のところ確認されていない。このため、過去に解読しておいた河原子村(現在の日立市)修験宮田篤親の筆写本を使用することにした。ただ現在はこの筆写本も所在不明であると云う。ここでは紀行文全文の内、冒頭の部分は原文のまま書き下ろし、旅日程の部分は原文を損なわないように大意を記述してみることとする。

封内道の記

旅の日記など、ことごとしくかきいでむもおこがましけれど、見にし聞きにしことも年の来経行侭に、そこはかとなくうち忘ることのみにして、今年三とせのあなたさえおどろおどろしければ、後の日見むためとてかひつく。

おのれ光謙が母なむ、久慈郡大生瀬の里佐藤氏の女なりしに、おのれおさなく身の足弱ければ、今年十あまり五つといふ年まで、いまだ外つおほ父おほばの墓へ拝みまいらせぬことのほいなければとて、姉婿なりし光禘をいざなひ童一人を具して、嘉永のとしの二とせやよひ二十あまり二日出たつ、あしたより雲はれわたる。

（以上、原文のまま、以下大意）

三月二十二日、早朝自宅出立、天気良し。真弓の新しく開拓された道を通り、亀作、幡村を越える。この村に長幡部の御社があるが、道を急ぐので参拝しないで遠くに見て通り過ぎた。夕刻に太田馬場八幡宮の宮司西氏宅に泊まる。この家は伯母の嫁ぎ先である。

二十三日、天気良し。早朝に急ぎ出立して、増井、大門村を過ぎて天下野の里に至る。ここで昼食を摂りながら休憩する。この街道沿いのあちらこちらで多くの子どもたちが集いて桜の花枝を持って犬追いなどをし、また、馬方の男も手に手に桜の枝を手折るなど心ありげに見えたので、

遠近にいぬ追ふわらは賤の男の
手ごとに折かあたら桜を

そこからはるか遠くに金砂の山を見ると、昔、佐竹義舜の朝臣が、山入義藤に叛かれた時、この山に立て籠もりなされた際に、私の遠い祖先である大窪伊賀守光重も主（佐竹義舜）に随って、逆臣義藤と戦い、文明九年睦月二十一日、子の大窪孫三郎と共に父子二人共に、この山にて討ち死にされたとの古事を思い出してそぞろ涙ぐんでしまった。

もののふの弓箭取身の常とさえ
知れど哀れにおもほゆる哉

やや行くと高倉村に着いた。この辺は左右の山が高く云い尽くし様がなかった。日も暮れかかる中を小生瀬村に出て道に迷いながらも、やっと大生瀬村の佐藤家に着くことが出来た。この夜はゆっくり寛ぎながら床に就いた。

（常陸太田市在住）

外大野要害の発見

五十嵐雄大

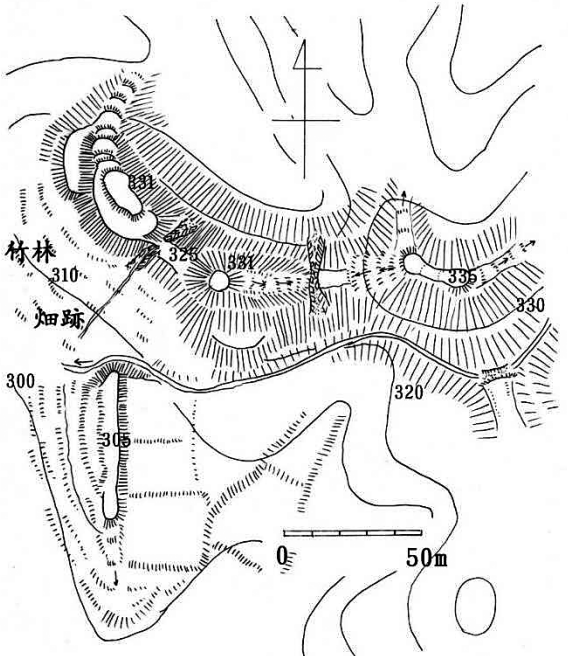
二〇二二年度までの五年間に実施された茨城県全域の中世城館跡を対象とした調査（茨城県中世城館跡総合調査）で、四二ヶ所もの城館遺跡が大子町域において確認されました。調査終了後も現地での城の踏査は続けられ、調査では確認できなかった城館遺跡を数ヶ所見つけることができました。今回はその中でも、大子町外大野地区で発見された城（外大野要害）を紹介します。

外大野要害は外大野のしだれ桜から南東側約五〇〇メートルにある山の先端部、標高三三一メートル地点を中心としたところにあり、遺構が残っています。城の中を古道が通り、東は八幡太郎伝承がある佳老山へ、西は同じ伝承が残る沓掛峠へ、北は佐竹軍の布陣伝承が残る檜山へ、南は内大野館へ接続しています。つまり、外大野要害は東西道と南北道が交わる交通の要衝に造られていたのです。遠隔地への中継地点としての「つなぎの城」の役割があったと思われます。

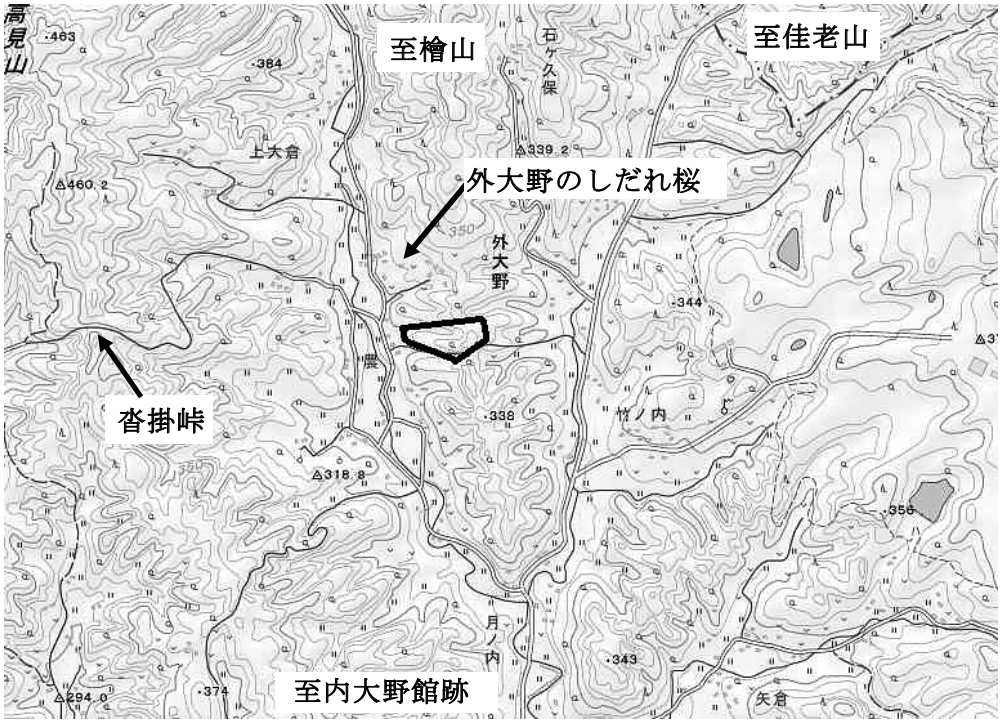
外大野要害に関わる文献史料は無く、城としていつ、どのように使われたのかははっきりしていません。しかし、麓に住む方からも城館伝承を聞くことができ、周辺地域で長年に渡ってその存在が知られていることから、外大野要害は戦争などで一時的に使われた城というよりも、長期間にわたって維持・管理されたものであったと考えられます。

城主は不明ですが、内大野の領主であった齋藤氏に関係する城館であったと思われます。

（茨城城郭研究会）



外大野要害縄張図　作成：青木義一
2023年1月調査



外大野要害所在地

北海道への勤労動員と大子農林学校生（上）

―「いはらき」新聞に見る戦争時代の大子（６）―

アジア・太平洋戦争の敗色が濃厚となっても、戦争は続いた。そのもとで陸海軍の兵力数は昭和一六年（一九四一）の二四一万人が、一八年三八一万人、二〇年七一九万人へと増大の一途をたどった。それは、各生産分野での熟練労働者や農業の中心的な担い手が失われていく過程でもあった。労働力不足を補うため、様々な施策を通じて生産現場に動員されたのが全国の諸学校の学生、生徒、児童達である。本稿では、増産に寄与するため遠く北海道での援農に応じた県立大子農林学校生の場合を紹介しよう。

農繁期の労力不足解消のため北海道へ学徒を送り込む計画は、昭和一八年度に具体化する。文部省、農林省、北海道庁の三者による派遣要項の決定を受けて、茨城県は県内の農学校長を集め、派遣の打合会を開催した。その結果、水戸、石岡、取手、笠間の四校から二年生六三〇名を派遣することを決定する。期間は七月一日から八月一五日まで、となった（昭和一八年四月九日付）。

援農二年目の昭和一九年度、茨城県には八三九名が割り当てられた。その一部を担ったのが大子農林学校の生徒である。動員期間は八月一四日から一一月一五日までの三カ月、派遣先は上川郡上富良野村である。出発の様子は、次のように報じられている。

「大子農林学校学徒勤労挺身隊二年生九十四名は臍を固めて待機中の北海道出撃の晴れの日が来た十四日薄暮時、指揮者小林、石崎両教諭に引率された若き農兵隊は武装に身を整へて満々の闘志を眉宇に湛へて歩武堂々駅頭に繰出せば待ち構へた多数町民の温かい老婆心と激励の情景暫し樽川校長から『母校の名誉にかけた君達の奮闘を祈つてゐる』と激励の言葉を贈る、八十五日間の汗闘だ、必ずやり抜く決意は全学徒の緊張した面にヒリリと動く、万歳の歓呼がどつと湧いた、午後六時四十九分なつかしの郷を離れ勇躍壮途に上つた」（昭和一九年八月一六日付）、と。

八月一七日、茨城県からの学徒勤労報国隊一行は無事に目的地に到着した。その隊長を務めた結城農学校の岡野教諭は、「目下此の地燕麦の刈入調整、馬鈴薯の収穫、野菜の最盛期、流石北海道の中心穀倉地はこれより収穫の黄金時期とも申す可く…我等学徒は決戦下その使命を体し行学一体教学の本領を発揮し国家の要請に応へる覚悟に御座候」（昭和一九年八月二二日付）、と報告した。故郷から遠く離れた初めての土地、慣れない生活環境のもとでの過酷な援農作業がこうして始まった。

北海道での農作業や生活ぶりを伝える記事は、残念ながらない。任務を終えて大子町に戻った際の様子は、次のようであった。「県立大子農林学校二年学徒勤労挺身隊八十九名は…今夏八月十五日母校を後に勇躍北海道に出動以来三ケ月に近い長期に亘る勤労増産に日頃鍛へた腕を揮つて異郷に連日の敢闘を続けてゐたがその間一名の落伍者も事故もなく無事任務を完了して十五日午後零時十分大子駅着で懐しのわが町の土を踏んだ（後略）」（昭和一九年一一月一九日付）。北海道という遠隔地から全員無事に帰還できたことがいかに大きな喜びであったか、想像に難くない。（齋藤典生）

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　齋藤　典生（大子町歴史資料調査研究員）
　　藤井　達也（大子町歴史資料調査研究員）
　　大金　祐介（大子町歴史資料調査研究員）
　　神長　　敏（大子町教育委員会事務局）
　　大金　真理子（大子町教育委員会事務局）
発　行　大子町教育委員会
　　久慈郡大子町大字池田二六六九番地
　　☎０２９５（７２）１１４８
発行日　二〇二四年（令和六）三月一日